

医療・保健・福祉をめぐる社会動向	「医療・介護制度の動向」	川越 雅弘 (埼玉県立大学大学院 保健医療福祉学研究所 兼 研究開発センター)
	2040年にかけて、現役世代の人口減少と85歳以上高齢者人口の急増が同時進行する。こうした背景のもと、国は地域包括ケアシステムの構築・深化に向け、様々な施策を現在展開している。本講義では、リハビリテーション職を取り巻く環境変化について概観するとともに、リハビリテーション職に関連する医療・介護施策の動向について解説を行う。	
	地域ケアにおけるサービス供給の課題	備酒 伸彦 (神戸学院大学 総合リハビリテーション学部)
	本講座では以下に列記する観点から、これからの我が国の高齢者ケアについて考えていきます。○時代と共に変わるケア、○他者について考える、○話を聞くということ、○広い概念の必要性、○北欧ケアとの比較、○環境を考える、○疑って考える姿勢、○出口をつくるケア、○普通であることを支えるケア、○行為の自立と決定の自立、○生活機能 ≠ 身体機能、○私たちのなすべきことは？	
	社会福祉行政のあり方	高森 聖人 (一般社団法人虹色・大分県作業療法協会)
	この講義では、我が国における戦後の福祉施策の変遷を概観し、障害者福祉や高齢者福祉が措置制度から契約制度に移行したことや、地方分権改革により地方公共団体の事務が変化したことを踏まえ、社会福祉行政における国や地方公共団体の役割について学びます。また、障害者総合支援法および児童福祉法に基づく障害福祉サービス、並びに介護保険法に基づく介護サービスの仕組みや内容とともに、それらを運用する国及び地方公共団体の責務や費用の負担等について学びます。	
医療経済学	近藤 真司 (大阪公立大学大学院 経済学研究所)	
経済学の基礎知識に関して解説をしながら、医療経済学について講義を進めていきます。日本で行っている医療問題は、日本の経済問題、社会問題と密接に関係しています。医療だけでは解決できない問題も山積みで、経済問題も医療問題・医療制度を考慮せずに進めることはできません。経済学の分野において、医療問題の重要性が益々高まっています。少子高齢化による社会保障費の増加という問題に対して、現在から将来にわたっていかにして医療の質を確保しつつ、医療費の負担が国民にとって加重にならないようにするにはどうすれば良いのかを考えなければなりません。このことについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。		

地域ICTに活用する理由	セキュリティの基本	宮本 貴朗 (大阪公立大学大学院 情報学研究所)
	もはや日常的にインターネットが利用されるようになってきました。しかし、現実の社会では当たり前である「危機回避行動」が、相手が見えないコミュニケーションツールであるインターネットの利用においては行われていないように思えます。この講義は、主に情報セキュリティの観点からインターネットの現状を理解し、その上で情報セキュリティの考え方、情報に関連する法令などを理解するためのものです。	
	ICTのヘルスケアへの活用	菅野 正剛 (大阪公立大学大学院 情報学研究所)
	現在、情報通信技術(ICT)は急速に発展しており、インターネットやスマートフォンの普及によって、いつでもどこでも情報交換を行うことが可能となっている。ICTの発展は医療の現場にも大きな変化を与えている。本講義では、ICTの基盤となっているインターネットの仕組み、特に無線を用いたネットワークの利用、インターネットで実現されているアプリケーションと、これからの技術動向について解説する。	
	医療倫理と情報活用	紀平 知樹 (兵庫県立大学 看護学部)
	この講義では倫理とは何かということから始めて、医療倫理の基本原則である、自律尊重、無危害、善行、正義の四つの原則を説明します。そして、これらの原則を用いて、どのように倫理的判断がなされるかを解説します。また、個人情報保護など、情報の活用に関わる倫理的問題についても説明をします。	
ポストコロナにおけるリハ職の役割	北風 晴司 (前：日本電気株式会社 医療ソリューション事業部) (現：エヌウインド)	
新型コロナウイルス感染症の蔓延により、リハ職の役割は大きく変化しました。最大の要因は、「利用者(患者・要介護者等)のリハ職への期待と不安の変化」です。利用者の身体的不安感に加え、コロナの影響に関する限られた情報源や自身の対応への迷いなど、さまざまです。本講義では、ICTの活用に加え、利用者への心のケア等の対応も含めた「新しいリハ職の役割」とは何か?を考えていきます。		
在宅ケアにおけるICTと社会資源の活用	※演習 大演 江美子 (大阪市立総合医療センター) ※スクーリングでの演習	
極度のIT音痴である公立急性期病院のMSWが、2015年から医療用SNS(メディカルケアステーション)を導入して地域連携や在宅移行連携を実践してきました。その経緯と事例をお示ししながら、「目的」ではなく「手段」としての柔軟なICT活用を、みなさんと一緒に考えさせていただきたく思います。		

組織マネジメント	組織のマネジメント	澤田 辰徳 (東京工科大学 医療保健学部)
	この講義では主に病院や施設などリハビリテーション領域におけるオーソドックスな組織のマネジメントについて学びます。リハビリテーション領域を取り巻く医療・福祉情勢について学び、今後の動向を推察します。また、組織マネジメントの基礎、管理職やリーダーの役割、リハビリテーション職種の特長などから職場評価についても学修します。最終的にはマネジメントとしての問題の抽出と目標設定、問題解決法を学びます。	
	起業の組織マネジメント	谷 隆博 (株式会社かなえるリンク)
	私は作業療法士で医療技術者です。東京と大阪で会社を興した代表でもあります。専門職だからこそ気づく地域での課題に対し、その解決に向けて起業し、事業を通して人を豊かにすることも私たち専門職の使命といえます。実践を通してマネジメント力を鍛えられた本コース修了者こそ率先して地域課題解決の仕組み作りをチャレンジすることが望まれます。先達をヒントに「想い」や「情熱」をエンジンとして組織づくりを手助けませんか。	
	システム思考で業務姿勢の振り返りを	辻 洋 (大阪府立大学名誉教授) (元：大阪府立大学学長)
	本講義では、「経営」「情報」「システム」という用語について整理することにより、業務姿勢を変えるためにデータを利用する意義について解説する。その後、集めたデータを活用するために発想の転換(システム思考)が有効であることを事例を通じて紹介する。最終的に簡単な事例を通して、「基礎を多く知っておくこと」「それらを場面・場面で使える力を備えること」「長期的・多面的・根本的に考える力を備えること」の大切さを学ぶことを期待している。	
プロジェクトを成功に導くためのリーダーシップ	※演習 広瀬 正 (大阪公立大学) ※スクーリングでの演習	
リーダーシップ力は、ちょっとした気付きで誰でも習得できる一種のスキルです。4-5人のグループに分かれて演習をしながら、スキルを磨いてもらいます。ここでプロジェクトには、「会社を起業する」、「xx大会を成功させる」もありますが、身近な「部活を活性化しよう」、「職場を楽しくしよう」も含まれます。演習ですから、体験しながら、楽しくやりたいと思います。そこで何らかの成功のためのヒントを汲み取ってください。		

社会資源の活用 - 基礎	地域福祉の理論	小野 達也 (桃山学院大学 社会学部)
	2000年を画期として地域福祉は「主流化」し、近年は「政策化」してきています。今や社会福祉を考える上で、地域福祉の理解は欠かせません。本講義では、地域福祉の政策や活動という表面的なことではなく、地域福祉の基本的な考え方や進め方を教授します。これにより時代や状況が変わっても、その基本にある地域福祉を捉える力をつけることができ、よりよい地域福祉のあり方を構想できるようになります。	
	障害者支援の社会資源	田垣 正晋 (大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科)
	1つめ 社会資源として、障害者施策における市町村の役割をとりあげる。いくつかの自治体の事例にも言及する。2つめ 市町村障害者施策に対する障害者自身の参加について、障害者計画の策定と運営を題材にして説明する。事例は、大阪府八尾市や兵庫県豊岡市である。特に八尾市の住民会議を詳しくとりあげる。3つめ 八尾市の住民会議を地域福祉活動およびグループダイナミクスの視点から掘り下げる。3つの動画を学びを深めるために、動画中に紹介する論文をお読みになって下さい。	
	在宅医療体制の整備とソーシャルアクション	山中 京子 (コラボレーション実践研究所・大阪府立大学名誉教授)
	本講義では、在宅医療体制を整備するにあたり、在宅医療実践においては不可欠な活動である多職種・多職種の連携・協働についてまず基本的知識の獲得をめざし、その知識を基盤にさらに具体的な方法について学ぶ。加えて、視点を転じ、患者や対象者が求める医療を提供するという視点から、社会福祉における支援方法の一つであるソーシャルアクションについて基本的な知識の獲得をめざす。	
	ソーシャルキャピタルの活用	横井 賀津志 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究科)
基礎	近年、人とのつながりが健康に好影響を及ぼすことが医学領域においても報告されています。地域リハビリテーションの実践においても、心身機能、活動、参加とともに人との関係性も考慮に入れる必要があります。本講義では、ソーシャル・キャピタル定義、評価指標、健康への効用、実践例について講義します。講義終了後は、上記4つを多職種と対象者に説明できることを目標としています。	
	障害者スポーツと社会参加	片岡 正教 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究科)
	近年、オリンピック・パラリンピックのムーブメントによって障がい者スポーツの認知度が高まっています。障がい者にとってのスポーツは、健康増進だけでなく、社会参加のための一つの重要なツールとなり得ます。本講座では障がい者が参加できる様々なスポーツを紹介するとともに、リハビリテーション職者の関わりについて解説します。	

社会資源の活用 - 実践	行政機関・組織との連携について	逢坂 伸子 (大東市保健医療部高齢介護室)
	行政機関に配置されているリハビリテーション専門職の役割を学ぶ。その実践例として大阪府大東市のリハビリテーション専門職の活動を通して、地域支援事業における介護予防・日常生活支援総合事業、地域ケア会議、生活体制整備事業などの自治体の事業とその狙いについて学ぶ。	
	認知症の人を支える地域づくり	梅本 政隆 (元：大牟田市保健福祉部健康福祉推進室) (現：株式会社地域創生Coデザイン研究所)
	「安心して徘徊できるまち」をめざしてきた福岡県大牟田市の取組みは、認知症の人を本当に支えることができているのでしょうか。地域福祉における地域づくりの理論をとおして、認知症の人を支える地域づくりについて実践をふまえて考えます。また、国が示している地域共生社会の方向性をもとに、福祉に限定しない地域や社会のとらえ方について考えます。	
	地域で精神障害者を支えるために	三家 英明 (医療法人三家クリニック)
	入院医療中心で進められてきた日本の精神科医療は、まだまだ多くの課題を抱えたままである。精神疾患と障害を抱えて暮らす人たちが、希望を持ち、安心して、その人らしく生活していけるように、その課題に向き合い、支援していくことは、共に生きる私たちの責務でもある。ほぼ半世紀、精神科医として歩んできた道を振り返り、学んできたことを述べて、支援者として何がもたらされているのかを考えてみたい。	
	自助・互助の枠組みづくり	高畑 進一 (京都橋大学 健康科学部・大阪府立大学名誉教授)
実践	本講義では、地域包括ケアにおいて、ケアを受ける本人だけでなく、それを支える家族・介護者に対する支援の必要性について解説する。我が国の介護保険は、家族のつながりを前提に、家族を介護資源と考えてきた。しかし、近年の少子高齢化や家族形態の変化によりこの資源がやせ細っている。これが、介護離職や介護うつなどの要因となっている。これらの現状、本人と家族介護者を支援する考え方、方法について述べる。	
	自助グループ、ボランティアとの連携	河合 晶子 (三重県こころの健康センター)
	昨今、高齢者の支援においては、住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられる「地域包括ケアシステム」の推進を目指し、「自助」・「互助」・「共助」・「公助」を総動員した多様な社会資源が創出されている。本講義では、特に認知症高齢者の支援の場において、専門職が、自助グループ・ボランティアなどのインフォーマルな資源とどのように連携し、その専門性の発揮や役割の遂行をしていくかについて、事例を交えて概説する。	

最終段階在宅医療におけるお・け・る・生・医・療	在宅医療の実践	白山 宏人 (医療法人拓海会 大阪北ホームケアクリニック)
	在宅医療は住み慣れた場所においてLife (生命、生活、いのち(生き方、尊厳等)) を支援し、よりよく生き暮らすことを支援します。ただ生活状況や考え方は多様で、支援する側も制限のある(時間やマンパワー等)中で関わります。疾患や加齢等で徐々に低下する状況であってもより良く過ごせる支援も重要です。今回は在宅医療の現状や実践等をお伝えし、生活の場におけるリハビリのあり方について考えていきたいと思います。	
	講義内容：在宅医療の概念や現状、在宅医療における支援、在宅での多職種連携、在宅でのリハビリのあり方	
	終末期がん患者の看取りケア (理論)	岡本 双美子 (大阪公立大学大学院 看護学研究科)
	地域における終末期がん患者の看取りケアは、患者(療養者)とその家族が対象となるため、療養者が亡くなったら終わりではありません。看取りまでの残された限りある時をその人らしく過ごすためのケアや、家族が複雑な悲嘆に陥らないための支援などについて、医療従事者の立場から一緒に考えることができると思います。	
	在宅ターミナルケアの実践	※演習 稲葉 典子 (西宮協立訪問看護センター) ※スクーリングでの演習
	人生の最終段階をどこでどう生きるか、そこに対象の人生や生活をリハビリテーションで支援するみなさまがどう向き合うのか。在宅医療における終末期ケア=エンドオブライフ・ケアだからこそ、苦痛緩和へのアプローチなどリハビリテーション職も重要な役割を果たす職能だと考えています。それらについて共に協働する訪問看護師の立場からリハビリテーション職のみならずみなさまに問いかけ、一緒に考えていきたいと思います。	

在宅ケアにおける予後予測	内科領域における予後予測	今城 保定 (医療法人今城クリニック)
	疾患の予後予測はここ10年間、治療法、情報の飛躍的進歩、医療制度の変化、介護保険制度の導入等があり、大きく変化してきました。一方、疾患予防、早期発見・治療、進行・合併症の予防等は、予後予測に影響を及ぼします。それゆえ、総合知の必要性を痛感しています。	
	精神科領域における予後予測	関 晋太郎 (医療法人三家クリニック みつや訪問看護ステーション)
	本講義では、予後について「誰が予測するのか」、「どこで予測するのか」について再考するところから始まる。われわれ治療者は、予断と偏見、決めつけによって容易に目の前の人の持つ可能性を狭めてしまう存在になり得るということを、今一度自覚するべきである。その上で、これまでの生活史からもたらされた「人が持つ価値観」を劣等感・罪悪感・否定感という切り口から考えてみる。	
	理学療法学視点と介護予防	吉良 健司 (在宅りはびり研究所・株式会社らいさず)
	本講義は、在宅療養する難病患者、障害児・者、要介護高齢者の機能的予後に関する知識を深め、適切な予後予測に基づく対処方法についてお伝えします。リハビリテーションの基本であるアイデンティティの理解から予後予測の考え方、そして対象者のストレングスに着目した強み分析や、リハビリテーションSWOT分析の臨床活用について、具体的実践方法を学びます。日頃の臨床を原点から見直し、人としての復権につなげる学びを促します。	
	作業療法学視点と難病支援	小林 貴代 (森ノ宮医療大学 総合リハビリテーション学部)
	神経筋難病および医療的ケアを必要とする重度障がい者・児における支援の実践について、特にQOLの軸をなすコミュニケーション支援技術について紹介する。作業療法士の視点として、医療的支援、環境的支援、精神心理的支援、社会的支援の専門性について学習し、予後予測を踏まえながら、長期的展望と継続的な関与について、感じ、考え、臨床における活力と技術につながるよう自己研鑽に努めていただきたい。	
急性期病院からの退院後支援	上田 哲也 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所)	
急性期病院からの退院後支援に関して、地域包括ケアシステム内での急性期病院の役割を再考し、セラピストに求められていることを確認する。具体的な退院支援を、「住環境整備」にフォーカスを当て、臨床的側面、また研究的側面から学習する。		

訪問リハとリスクマネジメント	在宅看護学における患者・家族への関わり方 (基礎)	松下 由美子 (甲南女子大学 看護学研究所)
	この授業では、医療専門職者が医療機関ではなく、家庭を訪問して医療を提供する意義について説明します。その上で、在宅看護における家庭訪問の展開およびコミュニケーション技術について理解し、さらに対人関係理論を活用しながら、どのようにして患者・家族との関係を構築していくのか、その実践について理解することをめざします。	
	医学的リスクマネジメント	川見 清豪 (リハビリ訪問看護ステーションファミリア)
	訪問リハビリテーションのニーズは益々高まるばかりであるが、在宅においては病院のような生体反応情報を客観的に把握する機器も整っていないため、基本的には主観的情報をもとに利用者の生体反応情報を把握することになる。本講義では、医学的なリスクはもとより、非医学的(環境、対人関係、管理など)リスクについても解説する。また、リスク管理に直結する①バイタルサインの異常に対する対応について述べるとともに、②視診③問診④聴診⑤触診⑥リハビリ栄養のポイントについて述べる。	
	対人関連のリスクマネジメント	藤堂 恵美子 (医療法人マックスシール 異病院訪問看護ステーション)
	訪問リハビリテーションでは、利用者の急変や転倒等のリスクマネジメントに加え、連絡や移動に伴うトラブル、契約～開始～終了に至る過程でのトラブル等、様々な場面を想定してリスクマネジメントを行う必要がある。本講義では、職員および管理者の視点から、リスクマネジメントに関する考え方について学習する。	
訪問リハビリテーションの実践事例 (身体障害領域)	関本 充史 (かなえるリハビリ訪問看護ステーション)	
地域共生社会において、医療・介護・福祉等、世代や制度を越えて支援する体制が求められている。その中でも、医療と介護の連携や、介護予防に関しては、訪問リハビリテーションの役割は大きい。訪問に関わるにあたって、基本的な考え方と訪問の実践について講義する。		
訪問リハビリテーションの実践事例 (精神障害領域)	関 晋太郎 (医療法人三家クリニック みつや訪問看護ステーション)	
たとえ病や障害を抱えたとしても、出来ることなら住み慣れた自宅で過ごしながらか治療を続けたいと希望することは自然なことである。目の前の人が望む生活に向けて、治療者としての私たちが出来ることは、その人のこれまでの歴史に触れ、苦難に対する労いを土台に理解を深め、未だ輪郭が鮮明でないリハビリへの道を紡ぐことである。本講義は、精神障害の特徴を捉えた上でどのように関われば良いのかについてまとめたものである。		

生活期の疾病理解	認知症の理解と対応 (在宅、若年)	沖田 裕子 (NPO法人認知症の人とみんなのサポートセンター)
	在宅における認知症の人の支援について学びます。原因疾患別の症状の理解と、本人中心のケアの考え方、パーソンセンタードケアの視点を持って、支援ができるように、実践を交えてお伝えします。若年性認知症の人の支援も含めます。	
	認知症の理解と対応 (施設、高齢者)	田中 寛之 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所)
	新オレンジプランにおいては、施設・病院も地域の一部としてとらえることが重要とされています。我々セラピストは、認知症の人の居住している場所に関わらず、その人らしい生活を継続し、能力を維持・改善できるように支援する必要があります。本講座では、それらの手がかりになることを、これまでの経験と先行研究を概観しながら解説しています。	
	運動機能の加齢変化	樋口 由美 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所)
	本講義では副題として「虚弱な高齢者の歩行能力に対するアプローチ」を掲げ、加齢に伴う運動能力の推移、歩行能力の指標、推奨される運動プログラムについて解説します。最後に、我々の取り組み実践例についても紹介します。	
	運動機能の加齢変化	岩田 晃 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所)
	歩行機能・筋機能の加齢変化について解説します。具体的な計測方法や標準値を示し、またその意義を説明することで、それぞれのお立場で、実際に使うことができる知識・技術となることをイメージし、講義を構成しています。	
	栄養状態、摂取の加齢変化	大関 知子 (大阪公立大学大学院 生活科学研究所)
	身体機能の加齢変化について、食生活との関連の面から解説します。次に、エネルギーや栄養素の摂取量が適切かどうかを評価するために必要となる、日本人の食事摂取基準で策定されている指標の説明と、食事調査について解説します。そして国民健康・栄養調査について、その概要と近年の調査結果を解説します。最後に、高齢期における食事支援のポイントを紹介します。	
発達障害のある子どもの理解、対応	立山 清美 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所)	
「発達障害のある子どもの理解と対応」発達障害(自閉性スペクトラム症、注意欠如多動症、限局性学習症)のある子どもに関わる際に、リハ職として知っておきたい発達特性、とくに感覚と運動の問題と対応について解説しています。		
「学齢期における発達障害の支援」発達性協調運動症(不器用)の学齢期の困り感とその対応について、一緒に考えたいながら講義を進めます。また、最近では外部専門家や保育所等訪問の制度を活用して、療法師が学校に訪問することも増えてきていますので、学校における発達障害のある児童・生徒への支援(行動面、学習面、ADL面)について述べます。		
発達障害のある子どもの理解、対応	中岡 和代 (大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所)	
本講義は幼児期における発達障害の支援について「幼児期と発達障害」「発達障害支援に関する制度」「評価」「事例を通じた支援の紹介」の4つで構成しています。発達障害(神経発達症)の子どもの理解と支援、保護者支援、先生支援を含んだ内容となっています。		
脳性麻痺児・者の理解、対応	米津 亮 (東京家政大学 健康科学部)	
脳性まひを中心に、病態像の理解を踏まえた上で、これら対象児・者に求められる支援内容を解説します。そのうえで、ライフステージに照らし合わせた具体的な支援内容を紹介します。		